

カナダからの手紙

朝、出勤するのを待っていたかのように机上の電話が鳴った。

以前大学教授の秘書をしていた女性からだった。

「今イタリアに住んでいる友人が帰国して、日本でのお産を希望しているのでお願いしたい」という内容であった。

彼女の依頼の電話を受けてからだいぶ日にちが経って、その友達が外来を訪れてきた。小柄な体格をしたその女性は、イタリアで診てもらっている時、「妊娠月数に比べておなかの子どもが小さいようだ」と言われ心配なこと、初めての妊娠や一人で帰国したこと等、診察の間話していた。

早速、超音波(エコー)で胎児の発育状況を計測してみると、予定日より約2週間成育が遅れていると思われた。「今後の経過を注意して診ていきましょう」と話して帰宅させた。

しばらく経ってから「出産はカナダでしたいから、紹介状を書いて欲しい」と申し出てきた。事情を尋ねると、「夫がイタリア人で、生まれてくる子にはカナダ国籍を取得させたいと二人で話し合ったからだ」と言う。高齢出産であること、予想される胎児の発達の遅れ等、問題が無いわけではなかったため日本での出産を勧めたのだが予定日の2ヶ月前にカナダに発って行った。

忘れかけていたある日、バンクーバーから一通のAIR MAILが届いた。無事出産を終え、毎日悪戦苦闘で育児していることや、カナダでの医療システムの状況等が書かれていた。

各自ファミリー・ドクター(以下略:F・Dr.)を持ち、F・Dr.を通じて専門医を紹介され、すべての医療に関するチェック等は紹介された専門の人に依頼するため、日本の医師のように自ら超音波の機械を操作することはなく、触診だけの診察が当時不安で仕方なかったとも□。

最終的に分娩前なかなか児頭が下がらず、緊急の帝王切開による出産になったことや、手術の時、すべてのことが分業化されていて驚いたこと、そして保険が無いため一日病院にいと20万円かかり2日で退院したという。幸いなことに、小さいと思われた赤ちゃんは3180gあり<輝生・Michael>と名付けられ、生後1週間目の写真が1枚同封されていた。

「今思えば、日本の医療システムの方がきめ細かく感じられ感謝している」と結んでいたが、外国との医療の違い等色々考えさせられた一件である。